



第34号

● 目次 ●

巻頭言：ロシア科学アカデミー・シベリア支部創設50周年記念式典	1
最近のセンター研究会・講演会	2
プロジェクト研究部門 研究会	3-4
日本館だより	4
最近のセンター出版物	5
センター客員教授紹介	6
センター新メンバー	7
活動風景・編集後記	8

巻頭言

ロシア科学アカデミー・
シベリア支部
創設50周年記念式典

東北アジア研究センター 副センター長、教授 岡 洋樹

ロシア・ノヴォシビルスクにあるロシア科学アカデミー・シベリア支部は、1957年に創設されたロシアでも有数の研究機関であり、本年創設50周年を迎える。

1992年、東北大学はロシア科学アカデミー・シベリア支部と大学間学術交流協定を締結した。本学のシベリア支部との交流は、その後1996年5月に本センターが設置されたことよって、本センターを世話部局として進められることになった。この協定は、本年夏、三度目の更新が行われた。この間両機関の間では、シベリア支部総長と本学総長の訪問が相互に行われている。またノヴォシビルスクには東北アジア研究センター・シベリア連絡事務所が無機化学研究所内に設置され、研究交流などに活用されてきた。両機関の交流には、無機化学研究所、特に前所長クズネツォフ教授の貢献が大きい。

このほどシベリア支部創設50周年記念式典が開催され、本学井上明久総長の祝辞代読のため、筆者は本センターの寺山恭輔准教授、徳田由佳子助手とともにノヴォシビルスクを訪問した。式典は6月1～2日にノヴォシビルスクのアカデムゴログ内にある学者宮殿で開催された。式典は、ロシア連邦政府・地方政府・アカデミーの代表、外国の来賓をはじめとする人々が、時にコンサートなどのアトラクションを挟みながら、2日間祝辞を述べるといったものであった。壇上にはシベリア支部のドブレツォフ総長が席に着き、次々に壇上に上がる各界の代表の祝辞を聞き、贈り物を受け取った。祝辞を述べた人々はその場で贈り物の内容と趣旨を紹介する。式が進むに従って、壇上のドブレツォフ総長らの席の前には、贈り物の山ができてきあがっ



壇上で東北大学の紹介をすするドブレツォフ総長（中央）

ていくのである。我々の順番がいつなのか、なかなか知らされず、やきもきしたが、結局2日目の午後の外国の大学関係者の祝辞の際に出番を与えられた。祝辞代読の後、ドブレツォフ総長は壇上から東北大学について聴衆に特に解説をされた。

アトラクションでは、シベリア支部の歩みを紹介したスライドショーも見ることができた。ノヴォシビルスク郊外の森林を切り開き、広大な敷地にアカデミー・タウンを作り出すという大事業である。日本の筑波学園都市のモデルになったとのことであるが、国家と研究・教育の関係を考えさせるところであるが、式典に先立って5月30日にはシンポジウムが開催され、その一部を聴講した。ここではドイツの財団による報告がなされたほか、式典でも英国のロイヤル・アカデミー代表の挨拶があり、シベリアにおける国際的な学術交流の進展を伺わせた。また、中国や韓国との交流が進んでいることも知られ、東北アジアにおける学術交流の近未来の姿をかいま見た気がした。



最近のセンター研究会・講演会



東北アジア研究センター・伊達市噴火湾文化研究所 第1回学術交流連携講演会の報告

初夏の北海道において、伊達市噴火湾文化研究所との協定に基づく第1回の学術交流連携講演会が実施されました。東北アジア研究センターは、国内外の研究者や市民に所属教員の研究成果を公表するため、定期・不定期の講演会や研究会を実施しています。今回は、仙台圏外の一般市民を対象として、初めて伊達市噴火湾文化研究所との共催で講演会を開きました。会場は噴火湾を望む、だて歴史の杜カルチャーセンターで、明治初めの巨理伊達氏らの足跡を伝える開拓記念館の向い側にあります。

東北アジアからの講師は2人、谷口宏充教授と平川新教授が当地へ赴きました。講演に先立ち、伊達市の有田勉教育長が東北アジア研究センターと伊達市との間で学術交流協定を結び、その一環として本日の講演会が設定された旨の紹介をしました。その後、さっそく1人目の谷口教授による「中朝国境の活火山白頭山はいま」の講演に入りまりました。谷口教授は、地元の有珠山の例を引きながら、画像を紹介しつつ国内・国外火山噴火の状況、渤海王国滅亡前後の白頭山での噴火、現在の火山調査の方法などを、いくつかのセクシオン



に話題を分け、火山研

究の意義をわかりやすく紹介しました。昭和新しい山の新山も町ということもあり、参加した市民は眼を大きく見開いて聞き入っていました。しばしの休憩の後、2番手の平川教授が、「開国以前のロシアと北海道」と題して、江戸時代の日露関係の歴史を、ロシア側からの対応を基軸とし、漂流民やロシアの日本語学校などに焦点をあて、ややすれば大黒屋光太夫や日本側の視点に傾きがちな従来の日露関係を、ロシア側資料によって、立場を変えた視点から解き明かしました。話の間に、戦後の日本歴史学界で支配的であった江戸時代はお役人様と人民との緊張的対峙が社会の基本構造であったとする歴史観について言及し、それは一

面的なもので、江戸幕府体制が250年つづく背景には、協調的な社会構造もあったというような歴史学全般に亘る事柄にまで話がひろがり、「水戸黄門」的世界に慣れた聴衆に驚きを与えています。

今回、第1回の学術交流連携講演会ということで、センター側も力を入れ、講師・司会者、事務から伊藤・前川・酒井3女史の派遣を得、不足の伊達市の事務局側に合力したことから、講演会をスムーズに運営することができました。聴講者は伊達市側の発表数に拠れば60名強、市内の他、室蘭などから来られた方も多かったようです。伊達市で製作したポスターの他、開催前日の北海道新聞などにも紹介記事が大きく出ていました。講演会を総括された噴火湾文化研究所の大島直行所長は、次回以降は、聴衆は更に倍、3倍と力説していました。しかし、相対的に人口の少ない南北海道、無理をせず、互いに長く有用な交流をつづけ、100年前、巨理の人々が当地の人々にいただいた心遣いに答えれば良いのではないかと思います。所長大島直行氏によれば、伊達市の文教政策は20年、30年先を見えたもので、とりわけ人材育成に力を入れているとのこと。今回の本センターの活動は一つの知的貢献として、当地の地域活性化に多少なりとも有効に作用するでしょう。

当日、大島所長から直々に研究所秘蔵の藤田嗣治ゆかりのシャーマンコレクションをご披露いただきました。外部公開をする時は、協定先の本センターのみがその任を担えるとの言もいただいております。

(磯部 彰)





プロジェクト研究部門 研究会



ワークショップ777

「東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット」第1回研究会開催

本年4月より、プロジェクト研究部門として発足した「東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット」の主催による第1回研究会が「ワークショップ777」として7月7日(土)・8日(日)の両日、センター4階の大会議室で開催された。同プロジェクト研究部門は、モンゴル族、満州族、漢族等の東北アジア諸民族が用いてきた文字資料をコンピュータやインターネットで利用するための理論・技術・応用を研究することを目的としている。今回のワークショップは「モンゴル語のローマ字転写と翻字に関する諸問題」というテーマのもとに、モンゴル文献学およびその電子化利用の分野で研究を行い成果をあげている7名の研究者による報告とコメント、さらにそれを基にした討論が行われた。「ワークショップ777」の名称は、開催日(07年7月7日)にちなんだものである。

今回のワークショップは、「東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット」の発足を記念して、2日間の日程で、モンゴル人研究者も交えて、広く研究者・サークルに公開された形で企画された。中国から参加を予定していた内蒙古大学の徳力格尔(デルゲル)教授は、残念ながら来日間に合わず、あらかじめ寄せられていた発表原稿を包聯群(ホウ・レンチュン)客員研究員が翻訳・代読した。

ワークショップには総計30名以上の参加があったが、きわめて専門的なテーマの上に、センターの地理的な便宜を考慮すれば、極めて盛会だったと言えることができる。ワークショップではそうした熱心な参加者を交えて、活発な討論が行われた。



ワークショップ会場風景

【ワークショップ777 プログラム】

■ 7月7日(土) 14:00~18:00

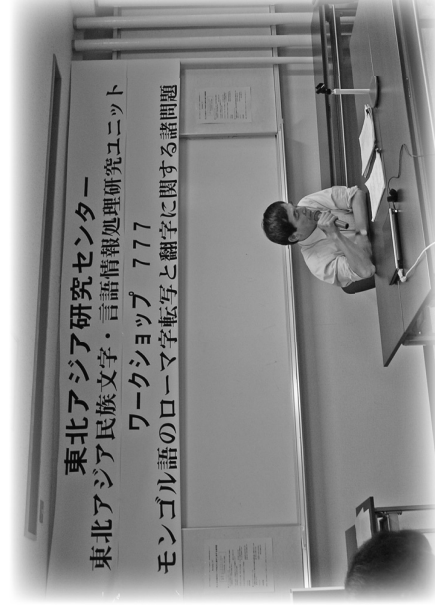
- ・モンゴル文語のPoppe (1954) 式ローマ字転写の特徴と問題点—円唇母音のローマ字転写の問題に寄せて— 栗林 均 (東北大学)
- ・Ligeti 式ローマ字転写とウイグル式翻字について—前古典期モンゴル文語の転写と翻字— 松川 節 (大谷大学)
- ・アルタンハン伝、オロンスム文書、ハラホト文書研究の経緯から 井上 治 (高根立大学)
- ・アラビア文字表記モンゴル語のローマ字表記 斎藤純男 (東京芸芸大学)
- ・コメント 角道正佳 (大阪外国語大学)

■ 7月8日(日) 10:00~12:30

- ・『中国蒙古古文籍総目』と『蒙古文甘珠爾丹珠爾日記』の書名のローマ字転写について 徳力格尔 (デルゲル) (内蒙古大学)
- ・コメント 孟達来 (ムンダライ) (中国社会科学院, 東京外国語大学)
- ・総合討論

同プロジェクト研究では、今回のワークショップの報告をもとに、モンゴル語のローマ字転写に関する論文集やハンドブックをまとめて出版することを企画している。

(栗林 均)



3つの報告に対して詳しいコメントを述べる角道教授

東北大学東北アジア研究センター・プロジェクト研究部門 「北アジアにおける帝国統治とその遺産に関する研究」第1回研究会

本研究会は、平成19年6月23日、本年度から立ち上げられた同名の研究プロジェクトの第1回研究会として開催された。このプロジェクトは、近代東北アジアの歴史的展開において重要な役割を果たした前近代帝国統治の諸特質、特に北アジアに淵源する帝国であった大清国の統治構造とこれに起因する諸問題の解明を目的とするものである。第1回研究会では、講演一件と研究発表三件が行われた。

モンゴル科学アカデミー歴史研究所研究員で、東北アジア研究センター客員教授として滞在中のソドノム・ツォルモン氏による講演「ズーンガル・ハン国建



国の諸問題」は、17世紀から18世紀半ばまで、中央アジアで強盛を誇ったズーンガルの建国時期と、その首長であったガルダンのハン号の性格について論じた。続く研究報告では、包格日勒図氏が「清末内モンゴル西二盟蒙旗墾務局の構成と役割について」と題して、清末新政策時期の西部内モンゴル開墾の実施機関である墾務局の成立経緯と職員構成を分析し、それが山西・陝西省が人員と経費を供給し、開墾業務に当たったものであることを論じた。鈴木仁麗氏「満洲国初期の興安省政策とその『自治』——『旗制』と『自治県制』の比較検討——」は、満洲国におけるモンゴル人を対象とした旗制と一般の「自治県制」の内容を比較しつつ、異なる文脈から制度化される両者それぞれの特質を論じた。岡洋樹「満洲の対モンゴル政策とチャハル部の服属」は、清初太祖・太宗期におけるチャハル部の服属過程を検討しながら、玉族に率いられて投降した集団・ザイサンなどの官員により率いられた集団・エジェイ自身とともに服属した集団の三つのグループが存在し、それぞれ満洲側の対応が異なっただけを論じた。各報告には、会場から質問が寄せられ、活発な討論が行われた。（岡洋樹）

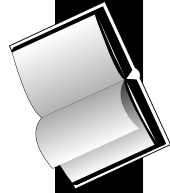


5月31日から6月1日にかけて、ロシア科学アカデミーシベリア支部の設立50周年記念式典が行われました。5月31日は主にシベリア支部に関わる研究者の集いであり、6月1日は外部の人々を招いての式典でした。二日目の式典には、ドブレツォフ・シベリア支部総裁、ロシア科学アカデミー副総裁、イワノフ副首相、フルセンコ教育科学大臣、トロコンスキー・ノヴォシビルスク知事と錚々たる顔ぶれが揃いました。イワノフ副首相はプーチン大統領からの祝辞を代読しました。時の副首相であり、次期ロシア大統領の有力候補の一人がシベリア支部50周年記念に訪れたことは、シベリア支部の研究活動をロシア政府が積極的に支援していることを意味します。

イワノフ副首相の代読が終了すると、休憩が取られ第2部に移りました。ここでロシア風の式典が現れます。日本では式典は厳粛かつ短時間で終わりますが、ロシアでは必ず遊びの要素を含めます。長々と祝辞が述べられる間に、コンサートを入れるのがロシア式です。今回の50周年式典でも様々なコンサートが行われました。式典のフィナーレを飾ったのは、ヤクーツクの若者の弦楽合奏団の演奏であり、見事でした。10代の少年少女からなる、この合奏団の腕前はプロ以上の水準に達しており、バイオリンの強力な指導者がヤクーツクにいることがわかりました。

（塩谷昌史）





……最近のセンター出版物……

◆岡洋樹編『モンゴルの環境と変容する社会：東北大学東北アジア研究センター・モンゴル研究成果報告II』（東北アジア研究センター叢書第27号）

本書は、2006年2月19～20日に開催された国際シンポジウム「モンゴルの環境と変容する社会」の報告論文集である。レーダ技術による地下水計測、リモートセンシング、文献資料などの環境情報をテーマとする第一部「環境情報：観測技術と方法」、植林・鉱山開発・牧地利用を扱う第二部「モンゴル草原の環境と人の役割」、宗教・経済・地理・言語の社会変容を論じた第三部「モンゴルの変容する社会環境」から成り、理系・文系の研究者による計14本の論文が掲載されている。これらの研究は、1999～2006年に科研費の補助を受けて文理の研究連携のもとにモンゴルの環境を多面的に解明しようとした研究プロジェクトの成果である。（岡洋樹）

◆明日香壽川編『シンポジウム「地域協力から見えてくる地球温暖化」』（東北アジア研究シリーズ8）

地球温暖化問題は国際交渉で活発に議論されているが、実際に温室効果ガスを削減する、あるいは、顕著になりつつある温暖化の影響に適応するときは、地域が主役になる。本シンポジウムでは、アジアのエネルギー問題や環境問題の専門家をスピーカーに呼び、そうした地域構造に即した視点から地球温暖化を見てみるとどのように見えてくるのかを考えることを目的とした。パネル・ディスカッションでは、「中国が省エネなどのエネルギー安全保障のための政策を実施することを、中国および国際社会が温暖化対策の文脈でそれをどのように認識するべきか（例：気候変動枠組み条約の中の省エネ対策の再定義）」「日中協力として何ができるのか」などが議論された。（明日香壽川）

◆磯部彰編『東シナ海近世現代出版文化研究』（東北アジアアラカルト第17号）

本アラカルトは、ニューズレターの研究者が、敗戦後の沖繩とそこに住む人の姿を沖繩出身の作家目取真俊を通して分析した研究「歴史・記憶・物語 目取真俊の小説を通して見える世界(おきなわ)」と、朝鮮朝で印刷された中国六朝時代の『文選』五臣注本を宋版や平安鈔本などと比較した書誌的研究から成る近世と現代の出版文化論集である。対象としたエリアは東シナ海沿岸地域と広く関係するため、論集の頭に「東シナ海」を冠した。（磯部彰）

◆山田勝芳編『松本健一「アジア主義と大東亜戦争—北一輝・大川周明・石原莞爾・中野正剛—』（東北アジアにおけるユートピア思想と地域の在り方研究会 講演会記録）』（東北アジアアラカルト第18号）

本書は、2006年12月13日に開催された松本健一麗澤大学国際経済学部教授による共同研究講演会の記録であり、当日配布した資料についても整理の上、付載したものである。東北アジアのユートピア的・理想的思想に踏み込んでいった場合、日本がアジアと関わる中で打ち出した「アジア主義」「大東亜」という「理想」の究明が不可欠である。これについて、特色ある思想と行動を示した北一輝以下を取り上げて多面的に論じたのが本講演であり、東北アジアの20世紀前半の歴史研究にとって非常に参考になる。（山田勝芳）

客員教授紹介

ウラジミール ロマノビッチ ペロスロドフ教授



ウラジミール ロマノビッチ ペロスロドフ先生はロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所教授 固体統計熱力学研究部門長として、固相状態における理論物理学的研究の分野で主導的立場にある。これまでに、

2002年10月～2003年2月と2004年11月～2005年2月の2回、本センター客員教授として着任した。この間に東北大学のスーパーコンピュータを利用した分子モデルのシミュレーション開発の共同研究を行い、10本以上の国際学術論文を発表し、結晶構造の解析や新しい材料開発の基礎研究に貢献している。

今回の招聘はペロスロドフ先生の科学学術の見識のもと

に、旧ソ連崩壊以降のロシアにおける戦略的な科学学術の研究を調査し、その結果を本年4月に発足したプロジェクト研究で構築する北アジア戦略データベースに反映させるものである。現在ロシアは科学特区を設け急激に発展する科学技術に力を注いでいる。特にペロスロドフ先生が所属するロシア科学アカデミーシベリア支部には大きな期待が寄せられているため、このような科学学術の変遷を身を持って体験した先生の調査は信頼性が高いと期待される。

また、ペロスロドフ先生の仙台での生活は、ご息が金属材料研究所の教員のため市内の自宅に同居している。日本での短い期間の3世代家族生活をしながら、この4月に高校に入学したお孫さんと毎朝一緒に川内方面へ通勤している。(工藤純一)

イグナティエヴァ ヴァンダ教授



7月1日、ロシア・ヤクーツク市からサハ共和国アカデミー人文科学研究所政治学社会学部門長のイグナティエヴァ ヴァンダさんが、東北アジア研の客員教授として赴任されました。9月30日までの3ヶ月間の滞在です。イ

グナティエヴァさんの専門は社会学・民族政治研究で、ロシアの民族問題とくにシベリアの少数民族問題に関する政治社会学的分析を行ってきました。とくにロシアとサハの関係をふまえた現ロシア連邦サハ共和国における住民の政治行動とエスニシティに関する定量分析では定評があります。主な業績(単著)として『ヤクチャーア住民の民族構成:民族統計学的研究』[露文](ヤクーツク、1994年)

『サハ共和国(ヤクチャーア):民族政治の歴史に関わる回顧と展望』[露文](ノボシビルスク、1999年)があります。受け入れ教員の高倉が編集した東北アジア研究叢書13号や東北アジア研究シリーズ(外国語)6号にも論文が所収されています。東北アジア研客員教授としての研究テーマは「サハ共和国近代化における経済ナショナリズムと民族対立:民族政治の動員過程」です。サハ共和国はロシアにあってダイヤモンドや金・天然ガスなどの資源の宝庫ですが、その利用をめぐる中央政府と地方政府・民族対立を歴史的に分析しようというものです。梅雨の仙台ですが、街の美しさがとても気に入ったそとで朝夕散策するのを楽しみにしているとのことでした。(高倉浩樹)

新メンバー紹介

佐藤大介教育研究支援者

(プロジェクト研究部門「歴史資料保全のための地域連携」)



本年5月より、本センターの教育研究支援者となりました佐藤大介です。

私が担当しているのは、本センターのプロジェクト「歴史資料保全のための地域連携」です。2003年7月に発生した宮城県北部地震に際しては、多くの方が被災されるとともに、地域に残されていた貴重な歴史資料が数多く失われました。この経験をふまえ、プロジェクトでは将来高い確率で発生することが予想される宮城県沖地震に備えた「災害「前」の防災対策」をスローガンに、

地域の方々や仙台地区の研究者や学生との交流を通じて、地域社会と研究機関との新たな協同関係について模索しています。

私自身の研究テーマは、19世紀日本列島各地に登場した「地域リーダー」たちの政治的力量について、奥羽地方をフィールドに分析しています。最近ではプロジェクトとの関係もあり、食糧確保や郷土防衛といった地域社会の危機管理において、彼らの果たした役割と意識について注目しています。本センターの皆様からいろいろなご教示をいただければ幸いです。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

包聯群 (ホウ・レンチェン) 教育研究支援者

(プロジェクト研究部門「東北アジア民族文字・言語情報処理ユニット」)



1997年に中国内モンゴル大学から留学生として来日し、東京外国語大学の研究生、東京大学の修士・博士課程を経て、本年4月より東北アジア研究センターの客員研究員、5月から教育研究支援者になりました。東京大学に在学中、2001年に消滅に瀕する満洲語の研究で、2003年には契丹文字の研究で(財)日本科学協会・笹川科学研究助成を受けました。博士論文では主に中国黒龍江省におけるモンゴル族コミュニケーション言語を対象

として、社会言語学の視点からモンゴル語と中国語の言語接触、言語変異の実態を研究しました。今後は、更に対象地域を拡大して、中国東北地域のモンゴル族コミュニティ言語における中国語・満洲語との接触や、変容しつつある言語の実態を取り上げて、社会言語学における理論的構築に貢献することを目指しています。

東京から仙台にきてびっくりしたことがあります。仙台は東京と違って、自転車でもどこにでも行けるのがとても楽しいです。旅行が好きなので、仙台の名所をいろいろ見学したいと思っています。

小野寺歌子教育研究支援者

(プロジェクト研究部門「前近代における日露交流史料研究ユニット」)



2007年5月から本センターで教育研究支援者として勤務している小野寺歌子です。専門はロシア文化史で、18世紀後半～19世紀前半におけるロシア帝国の文化史、とくに貴族層の教育文化について研究しています。ヨーロッパの辺境に位置するロシアがピョートル一世以降の西欧化と勢力拡大によってヨーロッパ列強へと成長を遂げていく時代にかんして、貴族が帝国の統治機構の中で果たした指導的役割や貴族の社会構成の

変化、そして貴族教育文化の変容プロセスとの相互関係を解明することをめざしています。

本センターではプロジェクト研究「前近代における日露交流史料研究ユニット」において、鎖国時代の日本とロシアの接触や交流を示すロシア側史料の翻訳・編集作業に携わっています。昨年度に刊行した東北アジア研究センター叢書『ロシア史料にみる18～19世紀の日露交流』第2集にひきつづき、本年度中に第3集の刊行を予定しています。ロシア文化史を専門とする立場から東北アジア地域研究の進展に貢献ができればと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。



言語と国家、宗教、文字…そして民族 —中央アジアのドゥンガン人とドゥンガン語の例—

柳田 賢二

(東北アジア研究センター・准教授)

2005年と2006年の夏、筆者は科研費（基盤研究(C)）「現代中央アジア少数民族における言語接触に関する研究」の採択を得てキルギス共和国の首都ビシュケク文化を観察する機会を持つことができた。ドゥンガン人という名称はロシア語の дунгане (dungane) によるものであり、この民族の人々自身もロシア語ではこのように自称する。しかしながら「回族」という漢字の北京語読みと著しく類似している。中国の少数民族である回族は互いに同族であると考えているのである。言語については、あるビシュケク区のドゥンガン人の言によれば、「新疆ウイグル自治州で生きるドゥンガン人（つまり回族）の言葉なら90%は理解できない」とのことであった。中国の回族は、その民族的起源が何だったのかは別として、現代においてはウイグル族や朝鮮族、イ族等々のように中国語（漢語）とは明らかに別々に別々の言語を信じているというわけではなく、中国各地に別の言語を持つというわけではなく、中国各々も、基本的にその土地土地の中国語を話して暮らしている。中央アジアのドゥンガン語とは19世紀末から20世紀にかけて中国北西部を出てロシア・ソ連領に入ってきた人々が話していた中国語方言由来とに大別される。ドゥンガン語は、ビシュケク付近のドゥンガン人の言語に属する。

「中国人」(露. kitace) と呼んで外ら別の民族であることとみならず。漢族を言語や外見で区別するの困難であることは彼ら自身認めるにも拘わらずである。ドゥンガン人の生活文化は、彼らが敬虔なイスラーム教徒であることを除けば、中国北方の漢族のそれに極めて類似している。例えば、食生活では箸を使い、主食としてラケマン (lagman; 中央アジアでは麺類を一般にこう呼ぶ) を食べることが、ドゥンガン人のラゲマンはタジク人やサマルカンドのそれとは著しく異なり、北京で出される「炒麺」(焼きそば) にそっくりであり、それゆえ、日本人にも非常になじみやすい。ラゲマンに限らず、ドゥンガン料理は一般に豚肉を用いているが、但し、イスラム教徒ゆえに豚肉を用いることは決してない。住居についても、部屋の半分だけが高くなっていて朝鮮のようにかまどの煙を用いる床暖房が設置されており、そこに土間から靴を脱いで上がって行くのをかいて座るといふ中国北方によく見られる構造となっており、また彼らの民族衣装もいわゆる「中国服」に前記のようにドゥンガン人は漢字を捨てて去ることと、中国語から切り離すことに成功した。しかし、彼らからは、中国と「中国人」(＝漢族) に対する感情には、明らかなアラン中央アジア人が観察される漢族のひとりたつたドゥンガン人として非イスラム教徒である、他方では今日経済的に飛躍的発展を遂げている新疆ウイグル自治区の中国人と異なり、イスラム教を可能にすることによって、中国の人口比(2001年の統計ではキルギス人の僅か1.1%)より中国の漢族・回族の総人口を凌駕している。こうして中国の漢族・回族にも拘わらず漢字を築き上げていくことが、日本人が漢字を知っている。ドゥンガン人の歌手が中央アジア各国から招かざるべき歌の他に中国語の現代歌謡までもが数多く歌われる。

2年にわたるビシュケクこの観察を終えて、ドゥンガン人と国家との関係の区別、「方言」「言語」と「文字」と使用可能な相互感情を意味する2民族間の相互感情をテーマにした社会言語学上重要な材料であるという印象を筆者は強く持った。



(小学校1年生用のドゥンガン語教科書)

この言語と国家との関係の区別、「方言」「言語」と「文字」と使用可能な相互感情を意味する2民族間の相互感情をテーマにした社会言語学上重要な材料であるという印象を筆者は強く持った。

編集後記

今年度に入ってから東北大学百周年記念行事等の用務でセンター教員一同大変忙しく、今号は発行が大幅に遅れてしまいました。心よりお詫び申し上げます。(柳田賢二)

東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター 第34号 2007年9月15日発行
 発行 東北大学東北アジア研究センター 編集 東北アジア研究センター広報情報委員会
 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41番地 東北大学東北アジア研究センター

PHONE/FAX 022-795-6010
 http://www.cneas.tohoku.ac.jp/